



(昭和35年生)

なんちゃって年女

市医師会から会報への原稿依頼の手紙。ン？新春にあたり年女年男になる会員への寄稿の呼びかけだ。あーそうか来年は年女だ。

子年1月2日生まれ。でも実のところ亥年12月24日が本当の誕生日なのだ。年末に生まれた赤ちゃんは、生まれて1週間もたたないうちに正月を迎え、数え年で2歳となる。そのため昔は年明けの日付で役所に出生届を出すことが多かったとのことだ。母が正真正銘の1月1日生まれだったので、祖母が気を利かせて1月2日で届け出したらしい。小学生中学生の頃の正月三が日は、店屋のシャッターは無情なまでにがっかり閉まっていた。なので、1月2日は誕生祝のケーキもなく、あるのは、おせち料理の残りだけだった。損をした気分でいっぱいだったが、それでも家族からかけられる「お誕生日おめでとう」の声は嬉しいものだった。成長するに従い、ちょこまかとした鼠より猪突猛進の猪の方が自分にあってる気がした。

結婚して新しい家族が増え、「誕生祝」が家族の一大イベントになった。正月の残りより、クリスマスイブの12月24日の方がご馳走を食べることができるし盛り上がるという理由も手伝い、気づけば12月24日で誕生日を祝うようになっていた。

つまり2020年は、私は「なんちゃって年女」なのだ。

話が変わるが、私はこれまで3回生まれている。

1回目は言わずもがな、正真正銘産声を上げたときだ（すぐには産声を上げなかつたら

南区・谷山支部
(総合病院鹿児島生協病院) 瀬崎 智子

しいが）。

実は両親は伊勢湾台風で被災していた。山梨県の山奥に居住していたときのことだった。父は山津波に飲み込まれたが九死に一生を得た。山道は分断され、身重だった母は自衛隊のヘリコプターで山から下りたそうだ。胎児だった私の記憶が残っているわけではないが、繰り返し聞かされる伊勢湾台風の出来事、なにより自宅にあった被災者に支給された毛布がそれが事実だと私に告げていた。固く目がつまつた暗いネズミ色の毛布。肌にちくちくと刺す肌触り・・・・被ってみても暖かくはなかった。捨ててもよさそうな毛布なのにと子供心に思った。が、両親はかなり長いこと大切に保管していた。両親の話と身近にあったネズミ色の毛布。不思議な事に、年を重ねる毎に私にとって伊勢湾台風は身近なものになっていました。

話が変わるが27年前、主人が愛知へと転勤になった。私も名古屋に移り住んだ。私の医師としての仕事もすぐに見つかるだろうと考えていた。しかし、当時、彼の地は4大学の学閥が強くどこかに所属しないと仕事はないと言われた。親戚知人ゼロ。主人は非常に多忙となり帰宅も夜中近かった。フィールド調査のため長期に海外に行くことも多く、頼れる人はいなかった。乳飲み子を抱えて見知らぬ土地の医局へ入局する勇気はなく、悶々とした日々を過ごしていた。

一人いじけていた時に、ちょっとした縁で、南医療生協病院の小児科部長の先生から「一緒に働きませんか」とお声をかけていただいた。お誘いに飛びついたのは言うまでもないが、実はこの病院は伊勢湾台風の被害に

あった人々が復興の中で立ち上げた病院だった。「ああ、この病院で働くために、私は名古屋に来たのだ」と感じた。そう思うことで救われた自分がいた。過去の出来事は未来のどこかへと繋がっていく。心からそう思った。

2回目の産声は子供を出産した時だと思う。

妊娠中は周囲からチヤホヤされてお姫様気分だったが、出産後は周囲の視線は子供に注がれた。お姫様から下僕になった気分だった。今まで自由に自分のために使っていた時間は子供のためにどんどん切り取られていった。

男の子3人の母親になった。兄弟とはいえ顔も違えば性格も違う。見事なまでに三人三様。仲はよいがお互いライバルでもある。小・中・高校生の時は、通う散髪屋さんも、3人とも違うという徹底ぶりだったのは今でも笑える。

息子たちはそれぞれに世界を持っていた。彼らの世界は色鮮やかで生き生きとして強烈な光を放っていた。私はその3つの世界に否応がなく引っ張りこまれた。私が育児のために切り取られたと感じていた時間は、形をかえて、全く知らない世界へ私を導いてくれていた。その世界は息子達の成長と共にどんどん広がっていった。大変だったが実に楽しく愉快な時間と空間だった。

今は手のかからなくなった息子達である。むしろ最近では「お母さんたらー」と注意を受けることもある。頬もしくなったなあと目を細める。が、共にあった彼らの世界は息子達の成長と共に、私からどんどん遠くへと遠ざかっていった。まるで夕暮れ時に一人取り残されていくような感覚を覚え、思わず立ち止まりうつむいてしまう。

それなのに、もうすぐ3回目の産声を上げる時が近づく。

「還暦」がその時だ。干支（十干十二支）

が一巡し誕生年の干支に還ることをいうのだろう。だが、誰かが「もう一度生まれ変わることだ」と教えてくれた。

母の胎内から生まれ出するわけでもない。子供達が新しい世界を与えてくれるわけでもない。・・・3回目は生まれるの嫌だな。このままでいいのに。

そんな下向き、後ろ向きな気持ちの毎日が続いていたある日の出来事だった。

夜中の交差点。あわや衝突事故。相手の車が赤信号無視で交差点に突っ込んできた。不思議と相手に腹は立たなかった。むしろ、事故が回避できた事に感謝した。今生きていることが嬉しかった。

その直後、運転する視界に流れ星。何十年ぶりに見る流れ星だろうか。ああ自分が流れ星にならなくてよかったとしみじみ。

生まれるのが嫌だなんてもう言いません。3回目の産声を私はあげたい。どんな世界が待っているかなんて、もうどうでもいい。前に進まなくてもいい。前に進めなくともいい。顔をあげて毎日を生きていけるのであれば、私はそれだけで「まるもうけ」十分だと思う今日この頃である。